



※歌川広重の描いた錦絵です。佐賀・鍋島藩の支藩である小城藩の上屋敷です。

東大・赤門（加賀藩前田家上屋敷）



※前田家上屋敷の正門は別にあります。

東京国立博物館 移築 （鳥取藩池田家上屋敷）

※岡山藩池田家の分家ですが、32万石あります。



江戸屋敷の始まりと役割

①大名 = 徳川家臣の江戸の住居

『慶長江戸図』に見る
徳川四天王家の屋敷配置
(慶長12年(1607)頃)



本多中務 (忠勝)
【平八郎】

井伊右近大夫 (直勝)
【直政の子】

秋元越中守 (長朝)
【秋元家初代】

ほぼ親藩・譜代大名のエリア

酒井左衛門尉 (家次)
【忠次の子】

榊原遠江守 (康勝)
【康政の子】

譜代と外様大名の混合エリア
羽柴姓多し。蒲生、浅野、
池田、堀、森

②参勤交代における江戸の住い

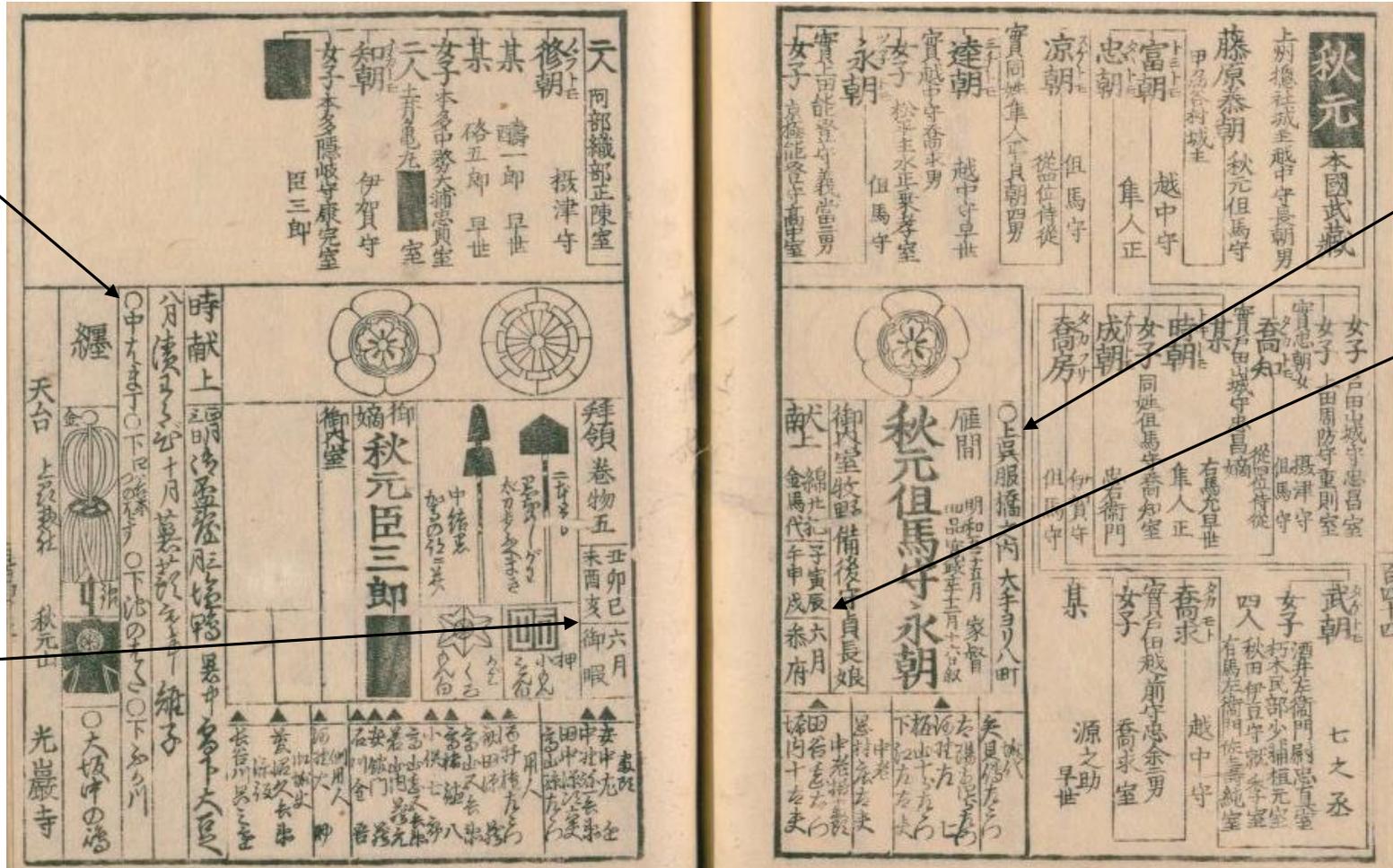
大名が一定の時期を限って江戸に伺候する制度

大名ごとに参府（江戸）、御暇（帰国）時期を指定

※「武鑑」というのは大名の紳士録で、いろいろなことが詳しく書かれています。見てると飽きません。

- 中屋敷
- ・浜町
- 下屋敷
- ・四ツ谷末角
 - ・池之端
 - ・深川

帰国する時期
(年・月)



上屋敷

参府する時期
(年・月)

つねとも
藩主：秋元但馬守永朝
明和5年5月家督
嫡男：秋元臣三郎（久朝）

『享和武鑑 御大名家
卷之二 分冊ノ二』
享和元年（1801）

③幕府の人質制度と大名妻子の江戸居住

- 江戸時代、諸大名が忠誠のあかしとして幕府に人質を差し出す
諸大名妻子には江戸居住を義務付け → 住居が必要
(諸大名江戸証人制。初期は大名家臣の子弟も質として置く)
- 証人の起源は加賀前田家の芳春院 (前田利家の正妻)
慶長4年(1599)11月 前田家(当主は利長)が家康から
謀反の疑いを掛けられる



異心の無いことを誓約し、母の芳春院および家臣の子を人質として江戸に送る



※芳春院さんです。

NHK大河ドラマ
利家とまつ 加賀百万石物語

④老中・若年寄などの公邸（役所機能）

登城の便が良く、相互の往来も密に可能で、城外でも役を果たす。
ただし、役を退くと屋敷を移ることが多い

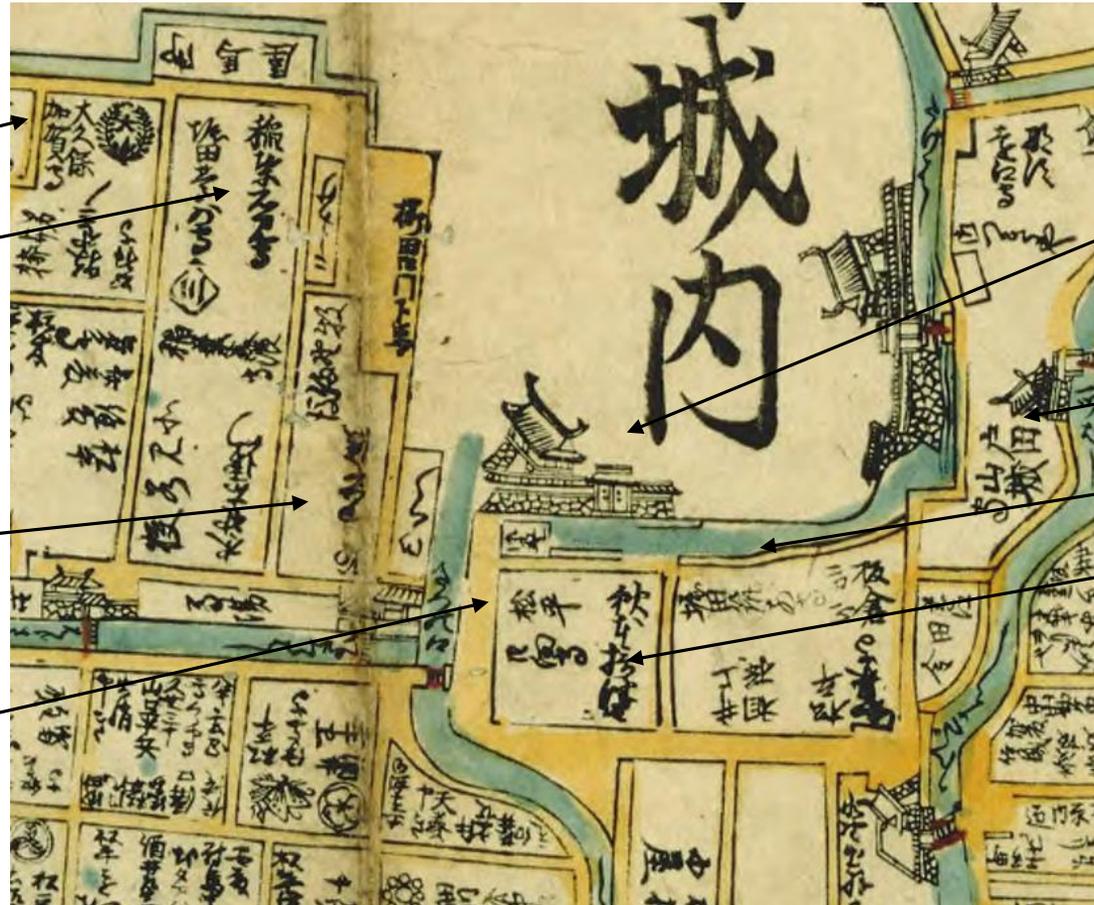
老中・大久保加賀守

若年寄・稲葉石見守

老中・阿部豊後守

松平日向守

貞享2年より老中



大手門

老中・戸田山城守
(喬知の実父)

大老・堀田筑前守

若年寄・秋元摂津守
元禄12年(1699)
より老中(喬知)

『参入江戸大絵図』 貞享元年(1684)

どのような江戸屋敷があるの？

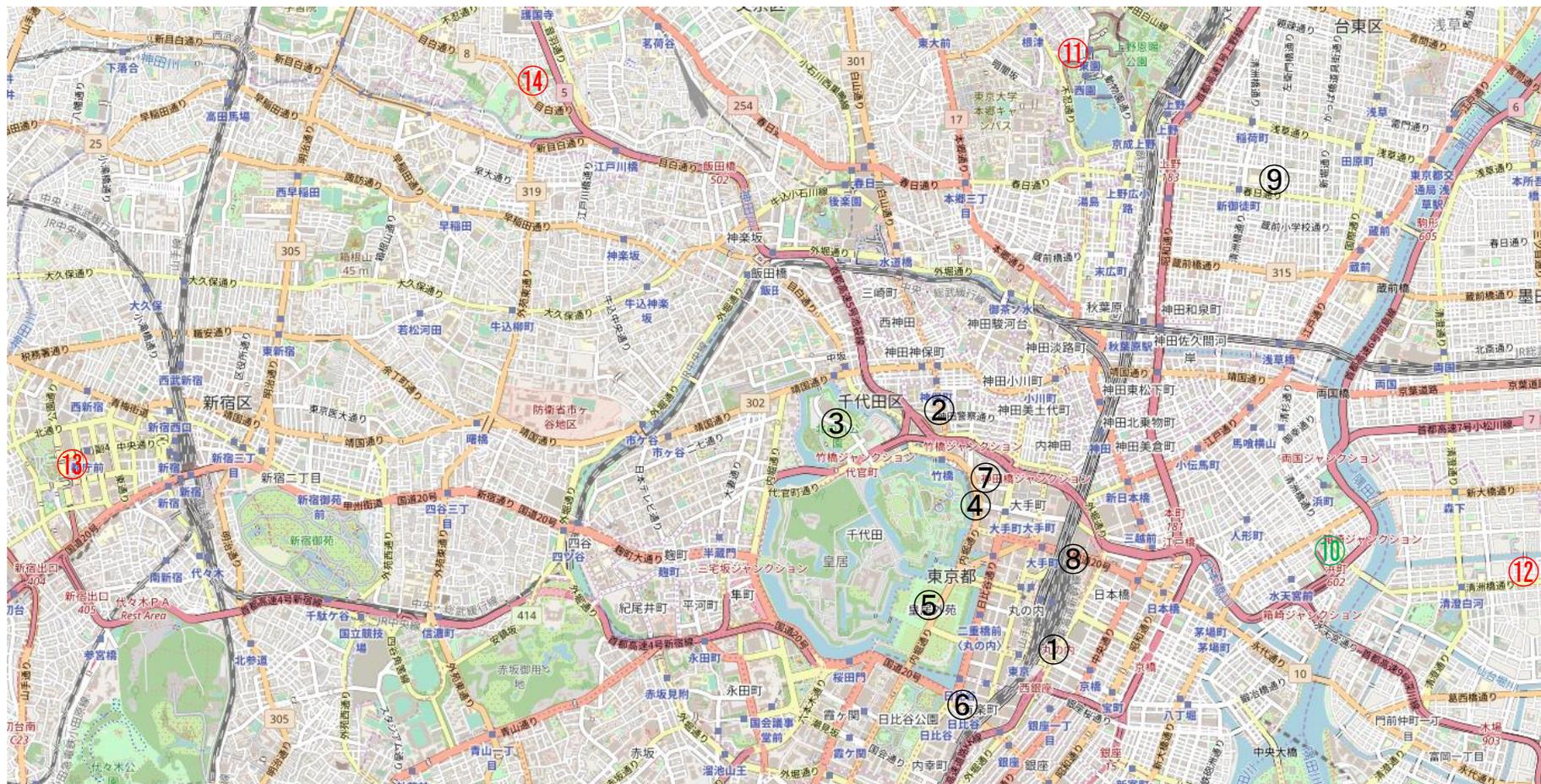
将軍から拝領 = 大名の私有物ではない

- ・ 上屋敷：藩主やその家族が住む公邸であり、藩主としての政務を行う
- ・ 中屋敷：隠居した藩主や嗣子の住いであり、上屋敷が罹災した場合の予備の邸宅
- ・ 下屋敷：藩主の休息用の別邸、国元からの回漕物資の荷揚げや蔵屋敷、藩士の住居など多面的

自前の屋敷 = 抱屋敷（用途は自由 = 下屋敷） 年貢を払う

※秋元家下屋敷の内の池之端の半分、角筈・深川は全部が抱屋敷です。

秋元家の江戸屋敷



© OpenStreetMap contributors

上屋敷（1か所）

- ①後の鍛冶橋辺
- ②一橋御門外
- ③清水御門内
- ④大下馬後
- ⑤和田倉御門内
- ⑥日比谷御門内
- ⑦神田橋御門内
- ⑧呉服橋御門内
- ⑨浅草新寺町

中屋敷（1か所）

- ⑩浜町

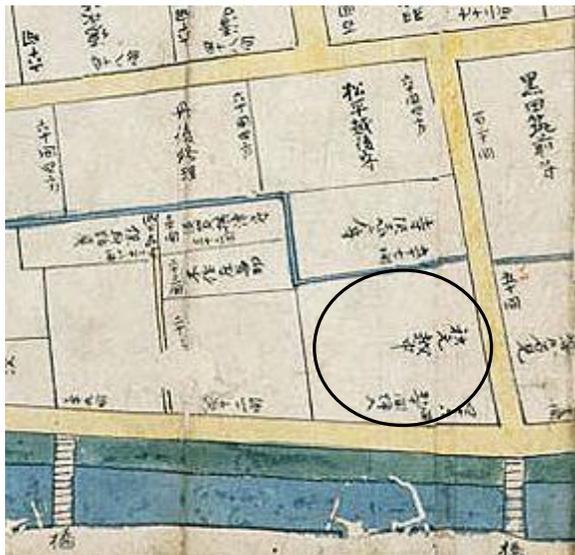
下屋敷（複数）

- ⑪池之端
- ⑫深川
- ⑬四ツ谷末角筈
- ⑭目白末関口？

秋元家の江戸屋敷（上屋敷）

※江戸屋敷の絵図は多く残されているが、一部を掲載する

①後の鍛冶橋辺の屋敷



『慶長江戸図』慶長12年（1607）

秋元家が大名になって初めて拝領した屋敷と思われる。隣接地は日比谷入り江の埋め立て地で、外様大名が多い。藩主は長朝。八重洲ブックセンターの向かい辺りか。

②一橋御門外の屋敷



『武州豊嶋郡江戸庄図』寛永9年（1632）

藩主は泰朝。泰朝は元和8年（1622）に家督を継いでいる。現在の神田の古書店街と皇居との中間地点。

③-1清水御門内の屋敷



『正保元年御江戸絵図』正保元年（1644）

現在の北の丸にある日本武道館の隣。藩主泰朝。明暦3年（1657）の絵図では越中守となっており、藩主は富朝

秋元家の江戸屋敷（上屋敷）

※江戸屋敷の絵図は多く残されているが、一部を掲載する

③-2清水御門内の屋敷



『江戸大絵図』延宝9年（1681）

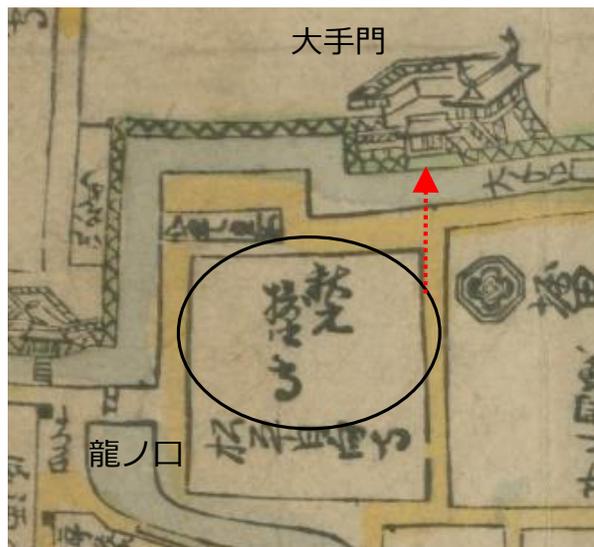
同じ北の丸ではあるが、清水御門側に移る。日本武道館の後ろ辺り。

藩主は喬知。

なお、※は秋元半左工門の屋敷。時朝と思われる。

※時朝は3代目・富朝の弟である忠朝の次男です。後に隼人正を名乗ります。

④大下馬後の屋敷



『分間江戸大絵図』天和2年（1682）

下馬門である大手門の前だが、御城から見ると後。大手門の橋が描かれていないが当時は木橋。橋を渡って登城。藩主は喬知。現在のパレスホテル辺り。※「龍ノ口」との表現もあり

江戸城登城の様子『千代田之表』より



※家臣は大手門の前で殿様の下城を待ちます。

秋元家の江戸屋敷（上屋敷）

⑤和田倉門内の屋敷



『江戸図』正徳4年（1714）

和田倉門

江戸城内堀の内側で老中という重責を果たすに相応しい場所。ただし、この正徳4年に喬知は死去。現在は皇居外苑・二重橋前の芝生の辺り。

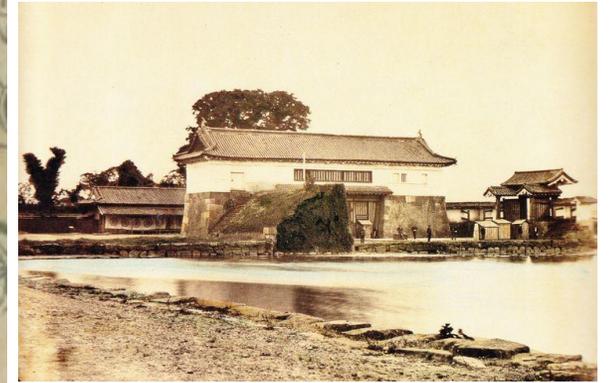
※⑥の屋敷はこの辺りで、内堀の外に出ます。

⑥日比谷御門内の屋敷



『分間江戸大絵図』享保2年（1717）

喬知死去後の喬房の頃。喬房も享保8年（1723）に奏者番になるが、一度、内堀の外に移転。日比谷交差点の東側辺り。



秋元家の江戸屋敷（上屋敷）

⑦ 神田橋御門内の屋敷



『分間延享江戸大絵図』延享5年（1748）

大手下馬門にも近く、幕府重職の屋敷が多い。将軍就任前の綱吉も神田橋門内に屋敷があった。藩主は涼朝。現在の東京消防庁から経団連会館の辺り。

秋元家の江戸屋敷（上屋敷）

⑧呉服橋御門内の屋敷



『御江戸大絵図』安政5年（1858）

江戸城から少し離れ、外堀の内側で大手門から八丁（900m弱）の場所。藩主は志朝。現在は東京駅の東北側メトロポリタン丸の内周辺であり、「馬元」の辺りはJR線路。

※田沼意次の屋敷でしたが、⑦の屋敷と交換になりました。

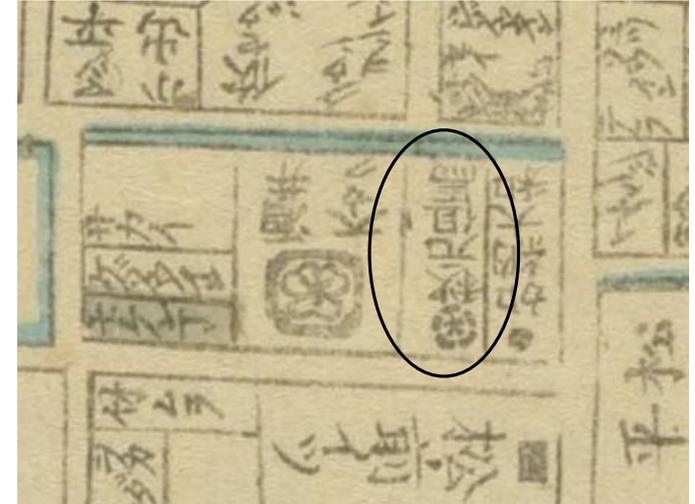


呉服橋御門の外側



呉服橋御門の内側
（北町奉行所方向から撮影）

⑨浅草新寺町の屋敷



『慶応改正御江戸大絵図』慶応3年（1867）

江戸城から遠く離れ、寺院の多い地域。秋元家の前は宇都宮・戸田家が使用。（上図の秋元と加納は別の資料では逆。）藩主は礼朝。

現在は都立白鷗高校の東側。
（隣の酒井大学頭の屋敷跡が白鷗高校）

江戸屋敷のお隣さん

①吉良上野介邸

鍛冶橋御門内・吉良邸
『新版江戸大絵図』寛文10年・1670



元禄11年の火事で移転



秋元喬知邸

伝奏屋敷

柳沢吉保邸

元・徳川綱吉邸

吉良上野介邸

大手門～呉服橋御門
『江戸大絵図』元禄12年・1699

明和4（1767）年からの秋元邸。
ただし、吉良は元禄14年（1701）
に本所へ移転したので時期は重ならない

②北町奉行・遠山の金さん



北町奉行所

呉服橋御門内
『分間江戸大絵図』天保8年・1837

遠山金四郎景元
北町奉行在任：天保11～14年
(1840～1843)

秋元家呉服橋屋敷
明和4年（1767）～
元治2年（1865）
※こちらは時期が重なります。14

館林藩

秋元家の江戸屋敷①

秋元家の上屋敷は9か所移転しました。それは概ね、江戸幕府の中での役割の変化と密接に関係していたようです。

江戸城本丸と秋元家上屋敷の物理的な距離は、幕府と秋元家の政治的な距離感といっても良いのではないのでしょうか。

※表紙の大名屋敷の錦絵、江戸の古地図は国立国会図書館のデジタルコレクションより、江戸城の写真は『レンズが撮らえた 幕末日本の城』（山川出版社）を参照しました。